

京都市室町・西陣 祇園における 言語生活の調査研究(Ⅱ)

井之口 有 一

目 次

第2部 室町商家・西陣機屋 祇園花街の 言語生活について (§46)	105ペ
1. 各集団の生活語彙(職業語)について (§47)	106ペ
(A)室町 (§48) (B)西陣 (§52) (C)祇園 (§60)	
2. 祇園花街の「身振り語」について (§67)	116ペ
図14 祇園花街の「身振り語」 (§68)	
図14 祇園花街の「身振り語」の説明 (§69)	
3. 命名について (§70)	118ペ
(1)改名について (§71) (2)屋号について (§78)	
4. 「あいさつ」について (§80)	120ペ
〔注1〕でっち入りのあいさつ (§81)~〔注10〕八朔のあいさつ (§105)	
む す び (§113)	126ペ

第2部 室町商家・西陣機屋 祇園花街の 言語生活について (§46)

われわれは前稿において、室町商人・西陣職人・祇園の舞子・芸子の「言語環境」を調査し、各職業集団の特性を記述した。本稿においては、これら各集団の言語生活の実態を記述するとともに、その特性を考察することにする。

本稿における調査研究の目的は、次のようである。

①まず、各集団にみられる、それぞれ根強い伝統的な商人気質・職人氣質・芸子気質が、いかにして言語生活に反映しているかをあきらかにする。(§45参照)

②各集団は、既述のように、いずれも保守的封建的な社会を形成していたので、おのずから、そこに各集団独特の言語法が発達していることが予想される。従って、各集団における職業語彙・身振り語などについて具体的に調査する。(§6・16・18・28・30・31参照)

③各集団における命名の態度や経済生活を反映する言語法、「あいさつ」の表現など、生活と密接する言語事実についても調査する。

この調査は、三集団の、主として昭和初期の言語生活を再構成するために、事例的に被問者を選定したものである。各集団における調査結果の考察・体系化の問題は今後に残した。

この調査研究は、井之口有一(代表者)・堀井令以知・出川光治・木村恭造・笹川祥生によって行なっている共同研究の成果である。なお、この調査に協力を与えられた高橋純子・久保真澄の両氏をはじめ、多くの方々に、心から感謝するものである。

1. 各集団の生活語彙（職業語）について（§47）

室町・西陣・祇園における生活語彙（主として職業語）を採りあげ、次の分類に従って解説する。

(A) 室 町（§48）〔§3参照〕

(1) 職制関係の語（§49） ①メイメ、②ウマ（②-2 コー、②-3 ワンカブリ）、③スンマ、④ワカイヒト、⑤ヤドバイリ、⑥ウチパン

(2) 食生活語（§50） ①イチロク、サンパチ（①-2 サカビ）、②センバ、③センノージ、④テンジョーガユ、⑤リキユウ

(3) そ の 他（§51） ①チキリ百軒、コンダ屋九十九軒、②ショクマワリ（②-2 カミマワリ）、③マーイリ、④オカミ

(1) 職制関係の語（§49）

① メイメ…奉公をする前に受ける「お目見^{めみえ}得」のこと。明治35年にT商店へ奉公した忠次郎さんは、紹介者につれられて、3日間「メイメ」し、それに合格して、「見習い」になり、3か月後、でっちに採用され、忠次郎を忠吉に改名した（§72参照）。メイメは京都一般でもいう。

② ウマ…室町問屋で、「若い人」（§49-④参照）などの手助けをするでっちのことを言った。「ウマ」は「馬」で、でっち車などを引き、「若い人」の使い走りや手伝をするから言ったもの。（例）ウマが来て、手伝ってくれハッタ。

②-2 コー…うえのものが、でっちを呼ぶときに、「コー」と言った店もあった。「コー」は「コドモ（小僧の意）」の下略語。「コー」と呼ばれたら、「へー」と答えた。

②-3 ワンカブリ…「デッチ」の髪形的一种。頭にお椀をかぶったように、真中（頭頂部と耳の線から上の側頭部と）をのこして、他を短く刈りこんだ髪形。西陣でもいった。

③ スンマ…「デッチ」を終えて、「スンマ」になる。「スンマ」とはデッチ頭^{がしら}のことで、でっちの監督指導に当たる。1年ほどして「若い人」（手代）になる。スンマは^{すみまがみ}「角前髪」の転略語。『物類称呼』に、「角前髪といふを、京大坂にて。すんまと云」とある。

④ ワカイヒト…手代のことで、スンマ（でっち頭）と番頭の間位に位する職階。「若い人」になると、無地の木綿の羽織を着ることを許され、はじめて小遣をもらう。スンマから「若い人」になると、「～吉」から「～七」に改名し、ひろうした。（§72・75参照）

⑤ ヤドバイリ…室町商家では、奉公人（番頭）が別家することをいう。昔はでっち10年、若い人10年を無事勤めた者は別家し、世帯をもって通勤することを許された。これを「通い別家」といい、別家してから、主家へ通勤することを「カタイレ」といった。優秀な者には、独立して商売をさせた。これを「独立別家」という。主家の持家などに住ませ、家財道具なども支給したが、室町商家では、同業は許されなかった。別家制度は一部を除き、戦後はまったくなくなった。「ヤドバイリ」は文献に、「宿這入り」とある。ヤドケ^ケバイリと現用し、ヤドハ

イリとはいっていない。(例)山田さんはこんどヤドバイリシハッタ。

なお、西陣でもヤドバイリを現用し、ヤドバイリした人を「ヤドバイ」という。(§61-④参照)宝永5年以前の『風流曲三味線』四の三に、「久三も是を溜め置かば、宿這入りの時元手の足しにもなるべきに」とある。

⑥ ウチバン…ウチバンは台所当番(炊事当番)。

(2) 食生活語 (§50)

① イチロク、サンパチ…月のうちで1と6、3と8のつく日をいった。イチロクは、月のうちの1日・11日・21日と6日・16日・26日。サンパチは、3日・13日・23日と8日・18日・28日のこと。この日には、ごちそうが付く。矢代仁かたでは、イチロクの日は酒日で、若い人以上に、酒と牛肉料理がつき、サンパチの日は魚がついた。なお、陰暦では1と6はものの始めの日、3と8は成就の日ともいわれる。

①-2 サカビ…酒が出る日の意で、酒日といった。月の1と6の日に、酒と魚が「若い人」以上に出た。また、山口源商店では、5と10の日が酒日であった。なお、西陣のサカビはヨンマの日。(§54-④参照)

② センバ…船場煮。センバは船場煮の下略語。室町の商家では、塩魚(「さば」など)と短冊形に切った大根などを塩味で煮こんだものをいった。大阪船場の商家では、食生活がつつましく、センバをごちそうとしたのが、室町にも伝わったものかと、室町のN氏は語った。(例)サンパチはセンバヤ。(「月の3と8のつく日はセンバ料理だ」との意。)享保17年の『傾城歌三味線』五の二に、「鱒^{ぶり}は霜月師走が賞祿、二月の末にせんばとは裏借屋の者も喰はぬ」とある。

③ センノージ…食事や弁当の隠語。「仙の字」を当てる。「センノジ」とは言わず、「センノージ」といっている。客に食事を出すべきかを主人に尋ねるときなどに用いている。この隠語は、他にも相当広く用いられているようである。

④ テンジョーガユ…水の多いかゆ(天井のうつるようなかゆの意)。昔、室町ではこうしたかゆを食べたという。(§57-③参照)

⑤ リキュー…菓子の隠語。矢代仁かたで現用。「リキュー」は利休か。(例)リキュー持っておいで。(主人→店員)

(3) その他 (§51)

① チキリ百軒、コンダ屋九十九軒…「千切屋に別家が百軒、菅田屋に別家が九十九軒」もあるの意。室町の呉服問屋の千切屋と菅田屋には、別家が特に多かったのにもとづく。なお千切屋系には、千切・千吉・千総^{ちさち}が、菅田屋系にはカミコン(菅田屋の本家)・ナカコン(分家の矢代仁)・シモコン(分家の山口源)などがある。

② ショクマワリ…「職回り」は、室町商家では、張屋や染物屋などの「職人のところへ行くこと」をいう。(「得意先回り」などに対して用いる。)

②-2 カミマワリ…西陣の機屋へ行くことを、室町商家で、「上回り」という。(西陣

は、室町の「かみ」〔北〕に当たるから。) また西陣では、室町方向へ行くことを、「下へ行く」という。(室町は西陣の「しも」〔南〕に当たるから。) なお、西陣では、室町へ行くことを「オタナへ行く」という。

③ マーイリ…「いらっしやい」の意。室町の山口源かたでは、店へ客がくると、「マーイリ」といって、客を迎えた。

④ オカミ…本家全体のことを室町商家で、「オカミ」(お上^{カミ})と尊称する。

(B) 西 陣 (§ 52)〔§ 11参照〕

(1) 職人関係の語 (§ 53) ①オヘコ (①-2 ヒボヒキオリテ), ②マカナイ, ③ネンアキサン, ④シタシヨク, ⑤カミト シモ, ⑥バンスケ, ⑦サラネブリ, ⑧オッチョコチョイ, ⑨ノラノ セッキバタラキ, ⑩ヒヤメシ

(2) 仕事関係の語 (§ 54) ①ガタリサンモン (①-2 ゴキントサン), ②ホトケモ サンモンメ, ③アテウタ, ④ヨンマ, ⑤ハオリ, ⑥シラ, ⑦アサマイリ, ⑧ツマル, ⑨タテマチ, ⑩シタナガレ, ⑪ドー

(3) 業種関係の語 (§ 55) ①ジマエヤ, (①-2 フセバタヤ, ①-3 フリウリ バタヤ), ②セバヤ, ③クロヤ, ④チンバタヤ, ⑤オモヤ, ⑥ハタダイク, ⑦メカニクヤ, ⑧ニバンヤ, ⑨ハシリ

(4) 製品・材料関係の語 (§ 56) ①サブイ, ②ナンモン, ③オキヌ, ④ヒッコシ, ⑤ツミ, ⑥ヌキバナガ チル

(5) 食生活関係の語 (§ 57) ①シヨクフージ, ②アラメオ タベル, ③メダマノ ウク オカイ, ④ナキマメ, ⑤シブー コブー

(6) 西陣機業地の通称 (§ 58) ①センリョーガツジ, ②イトヤマチ, ③ニシバタ (③-2 カミバタ), ④ズシ

(7) そ の 他 (§ 59) ①イモトノ ヨメイリ, ②オムロノ ハナ, ③ガチャマン コラセン, ④カモノ カンヌシ, ⑤キレダス, ⑥ジャガタラ, ⑦タテヘ スル, ⑧フロヤノ カマ, ⑨ヒラノ ジンジャ, ⑩ソラヒキバタ

(1) 職人関係の語 (§ 53)

① オヘコ…織子・機織職人。オヘコは現在では、機織職人を軽蔑する語となっているが、かつては、「御経講」や「御幣子」の字を当てた。オヘコの語原については、次のものがある。『西陣天狗筆記』によると、高機^{たかばた}六人衆が、日蓮宗を信じ、御経講中^{ごきようこう}を作っていて、それを、「御経講」と呼び、それがオヘコに転化したとある。また別に、西陣の氏神・今宮^{いまみや}神社の氏子を「御幣子^{ごへいこ}」といったのが転化してオヘコになったなど。機織唄に、「織屋オヘコが人間ならば、やんま蝶々も鳥のうち」とある。

①-2 ヒボヒキオリテ (紐引き織手) …低賃金の機織職人。ジャカードを、紐を引いて

回転させる旧式手機を織るのでいう。この職人は、低賃金しかうけない。機織唄にも、「ほれてつまらんヒボヒキオリテ、五厘たばこが買いかねる。」とある。

② マカナイ(賄い)…商売をまかされ、主人の権利が委任されている大番頭。織屋では、織物に必要な諸材料を賄うことが多いのでマカナイと言う。(例)マカナイさん、〇〇屋ハン、キハりました。

③ ネンアキサン(年明きさん)…年季奉公を終えて、別家した人や嫁入りした人。(例)ネンアキサンがキハりました。

④ シタシヨク(下職)…機業家のもとで、織物の紋もんず図、絹糸染め、織機の整備などをする業者をいう。明和4年の三上家文書にも、「下職 田舎へ其職を致し差下し候に付差止の儀御願申上候」(西陣の技術を他機業地に流出することを禁じた定め書)など出ている。

⑤ カミト シモ(上と下)…機業家の家族をカミ上と言い、奉公人をシモ下と言う。なお「但し下モ下モハ茶碗ずし」(上は上等のこけらずしを食べる。)[西陣の小西家の『歳中用事』]などという旧家の記録もあり、昔は家族の住むところは、1尺ほど高く作られ、奉公人は上がれないことになっていた。(§21参照)

⑥ バンスケ(番助)…あずかった絹糸をピンはねして売る人。二番屋の番をとって番助という。機業家から渡された絹糸をピンはねして二番屋(屑糸屋)へ売るので、二番屋へはいる人を見て、「あれ、バンスケヤで。」などという。(§55-⑧参照)

⑦ サラネブリ(皿ねぶり)…勤務先を次々とかえる機織職人。猫が皿をなめる程度で、食物を食べ残す(ネコワケ)ように、勤務先を転々とするから。(例)あの娘は、サラネブリやけど、ツコてみよ。

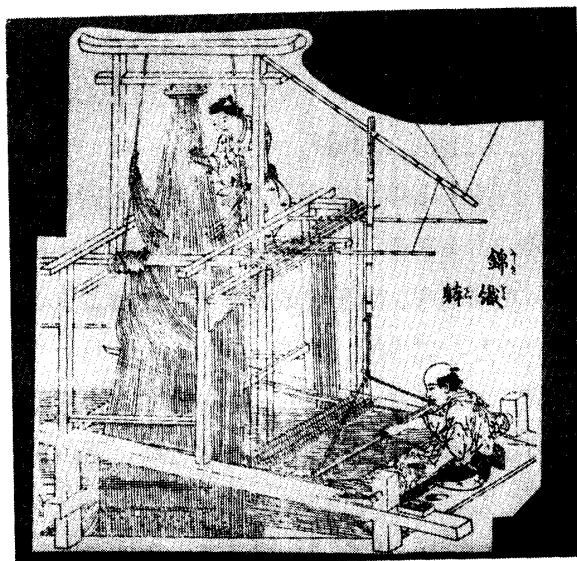
⑧ オッチョコチョイ…伝統的な機業家の織手に対して、新興機業家の織手のことを言う。旧家から見ると、彼女らが軽兆浮薄と見えたからであろう。それで、「〇〇会社のオッチョコチョイが帰イニヨル。」などと軽蔑して言う。子守唄にも「今のオッチョコチョイは、どこからはやるさ……」のように歌われた。

⑨ ノラノ セッキバタラキ(のらの節季働き)…金がなくなると仕事をする職人(勘定日の月末などで金があるので)。金のあるうちは、のらくらと遊んでいるが、金がなくなると、働き出すという西陣の職人氣質を示すことば。ノラとは、のらくら者のこと。

⑩ ヒヤメシ…ポーズとも。工賃を先借りする職人。

(2) 仕事関係の語(§54)

図13 高機(安永9年刊『都名所図絵』所掲)



(§59-⑩ソラヒキ参照)

① ガタリサンモン（がたり三文）…来客を嫌うことば。これは、来客が、ガタリと表戸を開けると、織る仕事が中断されるので、3文は損をするという意。

①-2 ゴキントサン（御金当さん）…仕事の邪魔になるのに、再々来る人。「金当」は「当金」の倒語。「ゴキントニ、ヨ一来るなあ。」などともいう。なお、『東海道中膝栗毛』七の中の「御きんとう」と同じ語形であるが、意味内容は異なる。

② ホトケモ サンモンメ（仏も三匁）…仏のようなまじめな賃機業者でも、機業家からあずかった絹糸を、若干（3匁ぐらい）はごまかすということ。なお、この絹糸は自家用の織物を織ったり、二番屋（§55-⑧）へ売られたりもする。

③ アテウタ（当唄）…あてこすりの機織唄。「唄はうとても話はするな 話は仕事の手をとめる」という機織唄もあるように、話のかわりに、即席の機織唄で、人の悪口を言ったりする「あてこすり唄」のこと。

④ ヨンマ…早じまいする夜。西陣では、昭和25年ごろまで、5・10・15・20・25・みそかの夜がヨンマにあてられた。（「ヨナベ」の反対語）『西陣天狗筆記』によると、「宵間といふをいつとなくよんまといふ」とある。また、西鶴の『好色一代女』には、「夜間」の字があてられている。

⑤ ハオリ…ヨンマの10日・みそかの夜に、午後9時ごろまで織ること。それで、『西陣天狗筆記』に、「宵間にもあらず夜織にもあらず半織といふべし」とある。

⑥ シラ…夜どおし織ること。『日次紀事』（黒川道祐）によると、「終夜勤之是謂^{シラスル}為白則達夜白之謂」とあり、また、『西陣天狗筆記』には、「何ぞ急ぐ注文の有時に夜どうしに織事をしらといふ」とある。

⑦ アサマイリ（朝参り）…夜なべ時間を延長する最初の日。11月1日ごろから、正月用織物の注文が多くなり、夜なべ時間が延長された。（例）アサマイリもチョコオスナ。

⑧ ツマル…織り上がること。織物が全部津巻^{つまき}（妻木）に巻きあげられたこと。

⑨ タテマチ（経待ち）…仕事待ち。津巻に織物が全部巻きとられると、新しい^{たて}経糸をとりつける（機ごしらえ）までの間、休むことから、「経待ち」という。その他、織機の故障のときなども「待ち」という。

⑩ シタナガレ（下流れ）…主人から使用人に使う次のようなことばづかい。主人が、「〇〇ドン、〇〇オシタカ。」など。文末に「オシタカ」という。これは、使用人の間では、使わない。

⑪ ドー…^{ヒ-}杼を越させるときの合図語。（例）ドーガ ヨケ カカッテル。（錦などを織るときに、色かずが多い。杼が多くかかっているから、そう言う。）

(3) 業種関係の語（§55）

① ジマエヤ（自前屋）…独立機業家。

①-2 フセバタヤ（伏機屋）…ジマエヤの一種。自家製品を問屋にすべて納品することを契約して、織っている織屋。

①-3 フリウリ ハタヤ (振り売り機屋)…ジマエヤの一種。自家製品を、どこの間屋へでも、自由に売りさばく織屋。

② セバヤ (狭屋)…お召屋。広幅の織物に対して、織り上り8寸(くじら尺)の幅のお召を織る織屋。「セバ」は「お召」のこと。

③ クロヤ (黒屋)…黒色系統の織物を織る織屋、または染物屋。なお、西陣では黒屋が繁昌すると、西陣が不景気になると言われる。

④ チンパタヤ (賃機屋)…他機業店の機を織る織屋。ここでは労働力のみを提供し、工賃をもらう。

⑤ オモヤ (主屋)…別家に対する主家。オミセ (お店)とも言う。西陣の織屋は、主家を中心にして、団結するしきたりがあり、別家したとき、主家から仕事をわけてもらうので、主家をお店という。なお室町商家でもオモヤといっている。

⑥ ハタダイク (機大工)…^{ばた}手機関係の道具屋。または、その道具を作る職人。

⑦ メカニクヤ…ジャカード製作店。明治初年、フランスから持ち帰ったジャカードを、西陣で模倣製作した。フランス語の *mécanique* から。

⑧ ニバンヤ(二番屋)…屑糸屋。二番屋は二番糸屋の略。屑糸を二番糸というところから。看板には、「くず糸・残糸・引越など高く買います。」と出ている。寛政4年「三上家文書」に「式番屑糸買取糸練屋撚屋へ入込盗物同前不正の糸類取扱」とある。(§53-⑥, 54-②参照)

⑨ ハシリ (走り)…低資本の買い継ぎ業者。お金がたまると、織屋を回り、織物を2本か3本ぐらい買って、それを売り歩き、いつもいそがしく走り回っているのという。

(4) 製品・材料関係の語 (§56)

① サブイ…織物の目方が規定より軽いこと。機業家が、賃機屋に渡した絹糸よりも軽くして織ること。(例)このオ絹、サブイナ。

② ナンモン (難物)…^{ナン}難(傷)のある織物。

③ オキヌ (お絹)…絹織物。木綿その他の織物と区別して、こういう。

④ ヒッコシ (引越し)…残った^{たていと}経糸。新しく織物を織るために、前の経糸をとりのぞくので、引越しと言う。

⑤ ツミ (摘み)…織るときに、正規に組織せずに、浮き上がったようにみえる織面の部分。

⑥ ヌキバナガ チル (緯花が散る)…^ヒ杼の調子が悪いとき、^{ぬきいと}緯糸が盛りあがる。その緯糸のふくれを「ヌキバナ」と言い、それが、所々に出るとき、「ヌキバナガ チル」と言う。

(5) 食生活関係の語 (§57)

① ショクフージ (食封じ)…使用人に粗食をさせること。旧家では、何月何日は、何を食べると決まっていた。なお、祝い日も、家族は「こけらずし」、「下モ下モハ茶碗ずし」(『歳中用事』)などと、区別している。また、お祭りで鯖を使うと、「鯖の中落を大根のせんば煮」(『歳中用事』)にするなど、その鯖の骨の部分も無駄にしないよう配慮している。「織屋小女郎に米の飯は過ぎる、百で二三升のぬか食わせ」などという機織唄もある。

② アラメオ タベル（荒布を食べる）…糸を扱う職業なので、飲みこんだ糸を体外に排出させるために、何日めかを決めて、荒布を食べる風習があった。荒布は、糸をおろすと信じられているが、これも食封じの一つである。

③ メダマノ ウク オカイ（目玉の浮くお粥）…米の少ないお粥。西陣では、朝はお粥に決まっていた。それも薄いお粥なので、目玉が映ると言われた。また、「お粥の中の黒豆が箸ではさめない。それは自分の目玉がうつっていたのだ」などとも言われた。「今朝も今朝とてお粥でけんか、わしの粥には薯がない。」という機織唄がある。室町では、これを「テンジョーガユ」といった。

④ ナキマメ（泣き豆）…ゆで豆。秋口から夜なべがはじまる。主人から、このゆで豆を食べさせられると、翌日から、夜なべがはじまる。その夜なべのつらさから、「泣き豆」とつけられた。夜になると、西陣の路地を「ウデーマメ、サヤマメ」とさびしい声で、「ナキマメ」を売りにきた。

⑤ シブー コブー…干^{にしん}練と昆布。何日めにか、干練と昆布を食べ、主人から「シブーコブーイケ」と質素・儉約につとめるよう、さとされる。これも食封じの一つである。

(6) 西陣機業地の通称 (§ 58)

① センリョーガツジ（千両ヶ辻）…京都市上京区大宮今出川のこと。糸問屋街であるため、毎日、糸を買う金を持ち歩き、1日に千両は通るといところからいう。『橋窓自語』（橋本経亮著）にも、これが見える。

② イトヤマチ（糸屋町）…京都市上京区大宮今出川を中心とする附近をいう。昔から、ここには、織物の糸を売る店が軒を並べていたから。文政5年の三上家文書にも、「金相場は糸屋町融金通」とある。

③ ニシバタ（西機）…千本以西の平^{ひらはた}機（二枚^{にまいばた}機）を織る地域。『西陣天狗筆記』の「高機平機差別の訳」に、「高機出来てより平機または西機二枚機などの名目出来たもの也。」とある。

③-2 カミバタ（上機）……水火天神（上京区堀川^{ごりよう}御霊前）附近の平^{ひらはた}機を織る地域。（ここは西陣のカミである北方に当たるのでいう。）

④ ズシ（辻子・凶子）…抜^{ロージ}け路地。西陣の路地は、江戸時代のままの細い抜け路地が多い。たとえば、紋^{もんやのずし}屋凶子（モンヤンズシ）・ひょうたん凶子・定家^{テンカンズシ}凶子のような抜け路地がある。

(7) その他 (§ 59)

① イモトノ ヨメイリ（妹の嫁入り）…値段と相談する意。妹の嫁入りには、姉と相談して決めるならわしがあるから。（姉^{ネー}を値^{ネー}にかけた語。）

② オムロノ ハナ（御室の花）…低い鼻。きりょうが悪い織り手。御室仁和寺の桜は背が低く、地面に近い、低い枝にも花を咲かせるところから。

③ ガチャマン コラセン（がちゃ万こら千）…戦後、闇の織物をして、「ガチャン」と織ると、万の金がいり、「コラ」と税務署に言われると、千円の罰金をとられるということから言われた。なお、ガチャマン時代とも。

- ④ カモノ カンヌシ（賀茂の神主）…金がないこと。昔、賀茂神社の神主には、〇〇内膳^{ないぜん}などという名がつけられたことがある。その内膳を「銭無い」にかけたもの。
- ⑤ キレダス（切れ出す）…暇を作る。金を作る。経糸^{たていと}の残った部分を織ることをキレダスと言う。そのあと、経待ちになるので、暇ができる。主家の織物以外に、自家の織物にして売って、もうけるところから、金を作る意味にもなる。
- ⑥ ジャガタラ（Jacatra）…天然痘。ジャカードのシリンダーは、紋の針を受ける穴が多くあいている。その穴を天然痘のあばたに見たてていったもの。
- ⑦ タテヘスル…大宮通りや千本通りの繁華街をぶらつくこと。昔は、経糸をそろえる時、糸を持って、8尺の手経台^{てべだい}を左右に歩いて、そろえたことにもとづく。
- ⑧ フロヤノ カマ（風呂屋の釜）…値ぶみしても買わない人。「言う」に「湯」^ユをかけた語。
- ⑨ ヒラノジンジャ（平野神社）…みにくく太った織女工。平野神社は、北野を越えて行くところから、「北野越え」を「汚う肥え」とかけたもの。
- ⑩ ソラヒキ…空引き機^{そらひきばた}（高機^{たかばた}・京機）の略。なお高機のジャカードの役目をする職人を「ソラヒキー」（空引き職人の略）という。機織唄に「織手さんなら今言うて今よ、空引きさんならちと思案」と。（図13参照）

(c) 祇 園 (§ 60) [§ 23参照]

- (1) 身分関係の語 (§ 61) ①ショジョサン、(①-2 シコミサン)、②シンルイ、③エダハ、(③-2 ~スジ)、④ヤドバイリ
- (2) 披露・行事の語 (§ 62) ①ミセダシ、②オチツキ、③ホリコミ、④エリカエ、(④-2 エリカエサン)
- (3) 接客関係の語 (§ 63) ①オハナニ イク、(①-2 タテバナ、①-3 ハナガ オドル、①-4 オフレマエ)、②アト ヒク、③サシコミ、④スヤ ヒク、⑤ミセカリ、⑥クロトサン、⑦ワケシリ、⑧ゴマハン、(⑧-2 アブラムシ、⑧-3 マムキノ ボタン)、⑨ジイロ、(⑨-2 キャクイロ、⑨-3 イタチ)、⑩ヤカタイリ、⑪サンバイ、⑫ソロソロ オキバリヤス、⑬ハシナイ カワワタリ セントキヤス
- (4) 芸事の用語 (§ 64) ①オテライリ、②カイゴト、③オトシ
- (5) 食事・持物関係の語 (§ 65) ①ホンショ、(①-2 カエショ)、②カラゲル、(②-2 ヒキズル)、③ノーサツ、④ユミ、⑤オブー、(⑤-2 デバナ)、⑥ジョジョ ハイタ トト
- (6) そ の 他 (§ 66) ①カエルノコワ カエルノコ、②フクワライ、③ゲンカイ、(③-2 ゲセク)、④ヒダリオ サス、⑤キタヤマ、⑥ガンガ アガル サカイ オヤメヤッシャ

(以上の語例は、昭和初年ごろに使用されていたもの。)

(1) 身分関係の語 (§ 61) [§ 27の図11参照]

① ショジョサン…戦前までは、見習期間中の「仕込み」のことをいった。その仕込みは「ミセダシ」前の数か月間、特定の見習い茶屋で、舞子・芸子としての修業をした。

①-2 シコミサン（仕込みさん）…ショジョサンのことを、現在では「仕込みさん」といっている。

② シンルイ（親類）…子方屋内や子方屋間での、女主人・姉芸子・妹芸子といった義理関係をいう。（例）竹葉^{たけは}さんと美代葉^{みよは}さんはシンルイドッセ。

③ エダハ（枝葉）…「スジ」とも。主として、姉芸子と妹芸子などの義理関係の系統。広義には、子方屋どうし、お茶屋どうしの系統にもいう。

③-2 ～スジ（筋）…義理関係の系統をいう。（例）豆スジ（豆の字がつく芸名をもつ、義理関係の系統）

④ ヤドバイリ（宿這入り）…子方屋の^{うちこ}内子であった芸子が、年季があけて、子方屋から独立し、^{じまえ}自前芸子になること。（§ 49-⑤参照）

(2) 披露・行事の語 (§ 62)

① ミセダシ（見世出し）…仕込みから、舞子や芸子になること。これをデルともいう。（§ 28参照）

② オチツキ（落ち着き）…披露の時、見世出しする舞子や芸子が、あいさつまわりの最後にゆっくり落ちつくこと。なお、このお茶屋が、花代を買って縁起をつけてやることがある。（このお茶屋は、見世出しをした舞子・芸子にとって、一番のひいき茶屋であるから。）

③ ホリコミ（ほり込み）…芸子が復帰する時、検番の^し男衆がひいきのお茶屋へ、披露の差し紙をくばって回ること。

④ エリカエ（襟変え）…舞子から芸子になること。この時、舞子の時の赤い色の襟から、芸子になって白い襟に変わることからいう。髪^{かみ}の結い方も変わる。（§ 28・90参照）

④-2 エリカエサン…「エリカエ」した芸子を「エリカエサン」という。

(3) 接客関係の語 (§ 63)

① オハナニ イク（お花に行く）…お座敷に出向く。（§ 30参照）

①-2 タテバナ（立て花）…舞子や芸子を一日中たてつづけによぶ揚げ代。

①-3 ハナガ オドル…一人の舞子・芸子で、次々とお座敷を重ねること。

①-4 オフレマエ（お触れ前）…「約束花」とも。客が、舞子や芸子を呼ぶ約束の前ぶれをすること。（例）オフレマエ モーテマス。（§ 30参照）

② アトヒク（後ひく）…後のお座敷の約束をすることをいった。現在では「アトキク」という。（例）エライ勝手しますけど、アトヒイテ（アトキイテ）ますので。

③ サシコミ（差し込み）…売れっ子の舞子・芸子が、客から声のかからない舞子・芸子を、自分が呼ばれた座敷の客に頼んで、よんでもらうようにしてやること。（例）雛菊さん、サシコンダゲトクリヤス。

④ スヤヒク(徒矢ひく・素矢ひく)…舞子・芸子に、お座敷がかからず、お茶をひくこと。(例)オイド、タタイタラ〔縁起が悪いので〕スヤヒクワ。なお文政5年の『箱枕』(中)に「内ですや引いてゐた、てれかくしぢやないか」とある。

⑤ ミセカリ(店借り)…自前芸子が、お茶屋から連絡を受けるため、契約しているところ。

⑥ クロトサン(玄人さん)…花街で、役者や芸人の客のことをいう。

⑦ ワケシリ(訳知り)…舞子・芸子のすじ・性格・お座敷作法・慣習に精通している人。

⑧ ゴマハン(胡麻はん)…短時間の花代で、すぐ席をたつ、お茶屋にとって好ましくない客のことをいった。胡麻を煎ると、パチパチと、実がとびはねることから。

⑧-2 アブラムシ…用事もないのに、座敷からお茶屋の台所へきて、無駄話に時間を過ごす客。アブラムシ(ごきぶり)のような客の意。(例)こんなところで、うろうろしてたら、アブラムシといわれマッセ。

⑧-3 マムキノ ボタン(マムキノ キャベツとも)……真向きの牡丹は、けちんぼうな客のこと(金をつかんだら離さない人のこと)をいった。牡丹は花卉が上を向いて、中のものが外へこぼれ落ちない形で咲くからいうと。

⑨ ジイロ(地色)…芸事の師匠や役者で、芸子の情夫になっている人。

⑨-2 キャクイロ(客色)…素人で、芸子の情夫になっている客。

⑨-3 イタチ(鼬)…「色男」のことをいった語。

⑩ ヤカタイリ(屋方入り)…旦那が、自前芸子の家に通うこと。

⑪ サンバイ…金銭づくで旦那をつぎつぎと変える女。(例)あれはサンバイ芸子ヤ。

⑫ ソロソロ オキバリヤス…そろそろ旦那をお取りなさいよ。

⑬ ハシナイ カワワタリ セントキヤス…女をかえて、または場所やお茶屋をかえて遊ぶ客をたしなめることば。自分の旦那が水揚げされたお茶屋以外のお茶屋へ呼ぼうとするとき、「ハシナイ カワワタリ セントキヤス」といって、思いとどまらせる。

(4) 芸事の用語 (§ 64)

① オテライリ(お寺入り)…数え歳、6歳の6月6日に、師匠のもとへ通い、舞子・芸子としての芸事を習いはじめることをいった。現用されることは少ない。

② カイゴト(会事)…温習会のような花街の行事をいう。

③ オトシ(落し)…総見のこと。12月初旬に舞子・芸子がそろって、京都南座の顔見世を観劇する時に用いる。(例)成駒屋ハンのオトシ。

(5) 食事・持物関係の語 (§ 65)

① ホンシヨ(本衣裳)…五つ紋がついた黒地の正装のことで、紋日(正月3が日・7日・15日、八朔など)に着る。「ホンイシヨ」の省略語。

①-2 カエシヨ(代衣裳)…三つ紋がついた準正装用で、本衣裳が黒地なのに対して、これは色地である。正月のうちで、紋日を除く日に着用する。(§ 36参照)

② カラゲル(絡げる)…正装をした長いすその着物ではなく、すその短い着物を着るこ

と。(例) このごろの人は、ほとんどカラゲタハル。

②-2 ヒキズル (引きずる) … 舞子や芸子が、正装である長すその着物を着ること。

(例) ゴロツとヒキズル。

③ ノーサツ…舞子や芸がお座敷で使用する色刷りの名刺のようなもの。花街名と芸名とが刷ってある。「納札」と書くか。

④ ユミ (弓) … 胡弓のことを今でも「ユミ」という。胡弓は股間にはさみ、三味線は膝の上に乗せてひく。

⑤ オブー…お茶。「お茶をひく」という忌詞から、「茶」という語を忌んで、このようにいう。「ブブ」とも。

⑤-2 デバナ (出花) … 茶ばしら。(例) デバナが立って縁起がエーワ。

⑥ ジョジョハイタトト…牛肉。牛には、わらじをはかせるのでいう。(例) ジョジョハイタトトがたべたいわ。

(6) その他 (§66)

① カエルノコワ カエルノコ (蛙の子は蛙の子) … 親が芸子であった人の娘は、年ごろになると、やはり、舞子・芸子を志望するようになること。『忠臣蔵』九に「日本一の阿房の鏡、蛙の子は蛙、親に劣らぬ力弥めが大癡呆」とある。

② フクワライ (福笑い) … 子方屋では、元旦の雑煮を祝う時、あいさつのあと、全員で大笑いをして、縁起を祝うところもある。その大笑いすることをいう。(§104参照)

③ ゲンカイ (玄界) … 勇みはだ。下品のこと。(例) あの方はゲンカイナ オヒトヤデ。なお『全国方言辞典』に、「げんかい」は「任俠。だて。てきばきしたさま。ゲンカイな姿」(滋賀県神崎郡・奈良県宇陀郡)とある。また明和3年の『諸道聴耳世間猿』四に、「京中のわるざれ息子、天窓から足あたまの爪あひるの先まで当世に作りすまし、鳥又の驚さへ寒がつて出る朝の間から、川東を飛びめぐり、此玄界谷へまはり込みて、役者の名も小太の嘉七のと、番附にない名をいうてくろとがるの油。」(玄界谷とはげんかいな仲間の意)ともある。

③-2 ゲセク…下品。(例) ゲンカイはゲセクのことドスエ。

④ ヒダリオ サス (左をさす) … 人力車に相乗りの時などに、いくらか左ななめになるように掛けること。(例) アイカタ (旦那) とヒダリオ サス。

⑤ キタヤマ (北山) … 接吻のこと。北山の衣笠にいた巫女が死んだ人呼びだしたり、口よせしたところからでた隠語ともいう。

⑥ ガンガ アガルサカイ オヤメヤッシャ…「お金の額がかさむので、きょうの遊びはおやめなさいよ。」の意。今はあまり用いない。

2. 祇園花街の「身振り語」について (§67)

祇園の生活語彙からも推測できるように、この身振り語は、祇園の花街における接客法の一つとして、生み出されたものである。

祇園甲部では、身振りによって舞子・芸子どうしが意思を伝え合うこともある。そのような身振り語には、いろは四十八文字(四十五音)それぞれを表示する図14のような記号がある。ただし、同音の「イ」と「キ」, 「オ」と「ヲ」, 「エ」と「エ」は同一身振り語で示される。これらの記号を組合せて、簡単な文表現ができる。これが使われる場合は、主として「お座敷」である。目の前にいる客に口頭言語では、都合のわるい場合(一般にお座敷では舞子・芸子どうしが話し合うのは行儀がわるいとされている。)や、芝居見物中のように、話を慎まなければならない時などによく使用される。

図14 祇園花街の「身振り語」(§68)

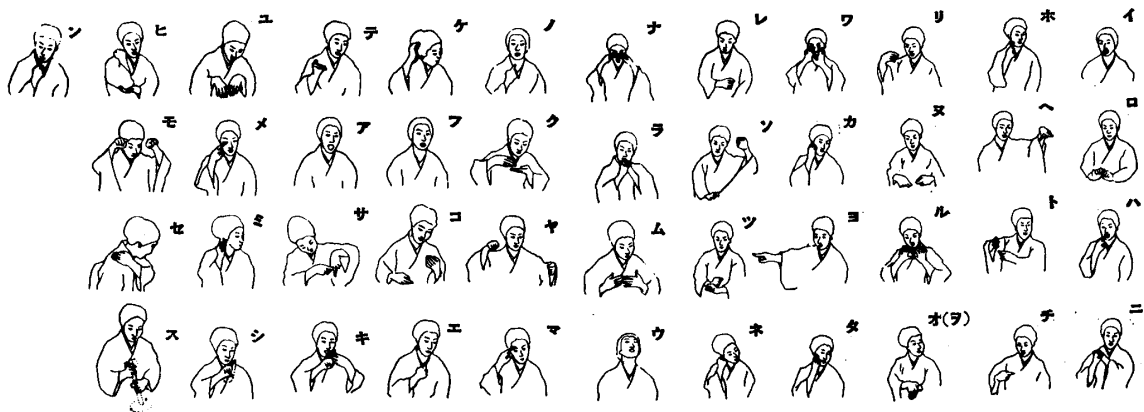


図14 祇園花街の「身振り語」の説明(§69)

- | | |
|------------------|----------------------|
| イ…イケズの「イ」の口形。 | ウ…上を向く。 |
| ロ…艦をこぐ動作。 | ノ…のどを指す。 |
| ハ…歯をさす。 | ク…食う動作。 |
| ニ…荷物のかつぐ動作。 | ヤ…矢をつがえる動作。 |
| ホ…頬をさす。 | マ…眉をさす。 |
| ヘ…指で「へ」の字を示す。 | ケ…髪のおさえる。 |
| ト…戸をあける動作。 | フ…ものを吹く口形。 |
| チ…乳をさす。 | コ…子どもをだく動作。 |
| リ…りん(鈴)を鳴らす動作。 | エ…襟をつまむ。 |
| ヌ…縫う動作。 | テ…手をさし出す。 |
| ル…瑠璃の形を示す。 | ア…「ア」の口形。 |
| オ・ヲ…緒をなう動作。 | サ…指で片かなの「サ」を示す。 |
| ワ…輪の形を示す。 | キ…指で片かなの「キ」を示す。 |
| カ…顔を掻く。 | ユ…両手で幽霊のまねをする。 |
| ヨ…横を指し示す。 | メ…目を指す。 |
| タ…顔をたたく。 | ミ…耳をつまむ。 |
| レ…(戸をあけて,) 礼をする。 | シ…指で平かなの「し」を示す。 |
| ソ…袖をつまむ。 | ヒ…ひじを手で押さえる。 |
| ツ…杖をつく動作。 | モ…両手で牛が, 「モー」となく格好。 |
| ネ…寝る動作。 | セ…背中を手で押さえる。 |
| ナ…泣く動作。 | ス…(両手で) すりこぎでする格好。 |
| ラ…ラップをふくまね。 | ン…「ン」の口形に, 人さし指をあてる。 |
| ム…胸をおさえる。 | |

図14の「身振り語」は、へ、キ、サのようなカタカナ文字を指で示す。また、「イ」は、イケズの口形、「ロ」は艫をこぐまね、「ハ」は「齒」を指で示す。長音の記号はなく、濁音は指で二つの点を打ち、半濁音は指先で○を書くきまりになっている。文の長さは、かな10字前後である。身振り語は現在では、祇園甲部のみのものである。子方屋によっては、次のような変異形を用いるところもある。たとえば、図14で示した標準形のほかに、「イ」を「井」のように指で示すもの。「ト」を戸をたたかっこうをするもの。「フ」を富士山の山形を描くかっこうをするものなど。なお、この他に身振り語の補助として、直接物を指でさし示して、身振り語に代替することもある。この身振り語は、現在では、若い舞子・芸子には、あまり知られていないが、戦前まではよく使用されたという。

3. 命名について (§70)

三集団で生活する人々の呼び名には、それぞれ独特の命名が行なわれている。室町や西陣では、奉公人の呼び名は、本名とは別に、「～吉」^{きち}「～七」^{ひち}のように、改名が行なわれた。祇園では、舞子や芸子になると、本名とは別に、「～豆」^{まめ}「～葉」^はのような芸名が付けられることになる。(§5・16・27参照)

(1) 改名について (§71)

① 室町 (§72)

室町商家に奉公しようとする者は、まず3日間のメーメ（お目見得^{みえ}）と、3か月間の「見習い」期間を経て、でっちに採用される。でっちになると、本名を改めて、「吉」をつける。（本名「源一」を「源吉」）また、でっちからスンマに昇格したときは、改名しないが、スンマから若い人に昇格すると、「吉」を「七」に改め、改名ひろうを行なった。また、のれんをわけてもらって、別家すると、姓に「さん」をつけてよばれるようになる。

② 西陣 (§73)

西陣でも数え21歳（兵隊検査）になると、本名を改めて、名の終わりの部分に「～七」または、「～助」をつけ、改名した。そして、羽二重の羽織と絹の袴と煙草入れとをもらう。特に披露のあいさつ回りはしない。なお、実力が認められた者は、数え28歳でヤドバイリし、本名にもどる。

③ 祇園 (§74)

舞子・芸子は、見世出しの時に、芸名をつけるが、縁起が悪かったり、オハナが売れない場合には、ハッケハン（易者）にみてもらって、芸名を変えることがある。昭和37年と昭和43年の祇園芸妓名簿を比較すると、次のような改名（文字の改正）の例がみられる。「光」を「みつ」、「加寿栄」を「佳寸栄」のように。

〔注〕 改名について (§75)

① 室町の改名ひろう (§76)

室町の商家（たとえば響田屋^{こんだ}）では、スンマから、わかい人に昇格すると、改名した。その時のひろ

うには、「袖ぐち」や「えり」を包んだ四つ畳みの紙に、次のように書く。(たとえば、山本源吉なら)

改 名

改メ

山 本 源 吉 源 七

これを大晦日の晩に、別家・番頭・若い人に出して、「こんど改名しましたので、よろしゅう。」といって、ひとりひとりに、改名のひろうをした。このように、スンマから若い人になると、呼び名が「～吉」から「～七」に変わった。

② 祇園の改名ひろう (§77)

改名ひろうの時には、差し紙を、お茶屋・子方屋に配る。差し紙には、たとえば、「御存じ 元吉町 岡愛内 照和 改メ 照子」のように謄写されている。

(2) 屋号について (§78)

① 室 町

室町商家の屋号には、通称としての呼名がある。たとえば、矢代家では、屋号は^{コンダヤ}譽田屋であるが、商徽号として、「角コン」の^コの^コのように示し、矢代仁氏の家をいう。また、「ヤマコン」の^コは矢代庄兵衛氏、「丸コン」の^コは矢代莊五郎氏の家をいう。なお、所在地によって、「角コン」を「中^{なか}コン」、「ヤマコン」を「上^{かみ}コン」、「丸コン」を「下^{しも}コン」のように称することもある。

② 西 陣

西陣の屋号についても、織物の製品によってつけられた「鳴屋」(縞お召しを製織する山川家)、「紋屋」(昔から紋織物を製織する三上家)、「帯屋捨松」(帯を製織する木村捨松家)などがある。

その他、地方出身の、たとえば「丹波屋」、他職からの、たとえば「ろうそく屋」、紋所にもとづく、たとえば「橘屋」等もある。

③ 祇 園

文化4年5月の『祇園細見げい妓名鑑』によると、その屋号に、「よろづ屋」・「祇万屋」・「井筒屋」・「京いづゝ屋」・「祇井筒」・「枅半」・「三枅屋」・「花菱屋」・「扇丸」・「あたらし屋」、地名にもとづく「京屋」・「うち屋」・「近江屋」・「水口屋」・「奈良屋」・「松本屋」・「桜井屋」、姓にもとづく「井上屋」などがあげられている。

大正12年『京都全遊廓・美人写真帖』には、子方屋・お茶屋に、たとえば、「井筒」・「近松」・「銭家」・「一力」・「富美代」・「大友」などがある。また、昭和43年「ぎおん・夏季号」に、たとえば、子方屋・お茶屋に「西村家」・「岡愛」、子方屋に、「沢村」・「藤本」・「丸八」、お茶屋に、「京屋」・「一力亭」・「富美代」・「まこと」などがある。

以上3者のうち、文化4年と大正12年のものとの間には、共通した屋号はきわめて少ない。

(3) 舞子・芸子の命名法について (§79)

祇園の芸子の命名については、命名の動機ならびに芸子名の語構成的特徴を述べることにする。現在の祇園芸妓名簿(「ぎをん」昭和37年秋季号所収)によれば、子方屋ごとに命名のしきたりがみられる。たとえば、M家では、4人の舞子・芸子の名はいずれも「豆^{まめ}」という語を

含んでいる（「小まめ・豆代・豆寿^{ひさ}・豆千代」のように）。また、S家では、8人の芸子の中7人まで、「真理^{まり}」をつけて「真理代^よ・真理秀^{ひで}・真理美^み・真理之^{ゆき}」などのようにいう。このように、舞子・芸子の命名にあたっては、それぞれの子方屋でうけついできた、伝統のある字をつけることになっている。「豆」のつくM家は「豆すじ」のように呼ばれる。しかし、かならずしも、子方屋伝来の名をそのままつけるとは限らない。いずれの場合も、命名にあたっては、^{オカーサン}女主人と姉芸子に相談し、八卦にもみてもらって、縁起のよい名をつけるしきりになっている。

語構成的な特徴としては、次のような点が指摘できるかと思う。接頭形式としては、「子桃^{こもも}」「小ます^こ」「小ゆう^{まめちよ}」「豆千代」のように、「子」「小」「豆」をつけて、小さくてかわいらしい印象を与えるものがあり、接尾形式としては、「千鶴葉^は・竹葉」のように、「葉」を、「花千代^{ちよ}・桃千代」のように、「千代」をつけるものなどがある。この他に、「たみ勇^{ゆう}・ひろ竜^{りゆう}・君春^{きみはる}・笑香^{えみか}・いく君」のような接尾形式もある。また、たとえば、義太夫芸子などには、「小六^{せう}・琴勇^{きんゆう}・筆多朗^{ふでたろう}・愛吉^{あいきち}・幸長^{しんちやう}・長治^{ちやうじ}・千栄次^{せんえいじ}・金助^{きんすけ}・金之助^{きんすけ}・愛之介^{あいすけ}」のような命名もみられる。以上の現在の芸子名を、『京都全遊廓・美人写真帖』（大正12年刊）に記された祇園新地甲部の芸子名と比較してみると、語構成の上では、それほど差異がみとめられない。

4. 「あいさつ」について (§80)

三集団には、それぞれ、職業関係の「あいさつ」に特徴がみられる。これら集団の職業関係のあいさつは、その集団における「しつけ」による結果である。

室町・西陣においては、「でっち入り」のとき（注1参照）、「オシキセ渡し」のとき（注2参照）、「藪入り」のとき（注3参照）などには、あいさつがかわされた。西陣では、室町のあいさつの簡略形がみられる。また、祇園では、「えりかえ」（注4参照）、「^{じまえ}自前披露」（注5参照）、「引き祝い」（注6参照）のときなどには、改まったあいさつが現行されている。

これら職業関係のあいさつのほかに、三つの集団には、年中行事に関する「あいさつ」がよく保存されている。たとえば、「事始め」（注7参照）、「大晦日」（注8参照）、「年始」（注9参照）、「八朔」（注10参照）のあいさつは、伝統的な京都のあいさつの形式を伝えていていると考えられる。京都の一般町家では、すでに滅びつつあるので、これらのあいさつを記録し保存することは重要であると思われる。以下、それぞれのあいさつの形態を示す。

〔注1〕 でっち入りのあいさつ (§81)

室町商家や西陣の機屋に奉公するでっちは、コドモン・コドモとも言われ、昭和初期のでっち入りには、次のようなあいさつが行われた。

① 室 町 (§82)

昭和初年ごろの室町問屋では、高等小学卒業者が多くでっちになった。室町（山口源かた）では、3日間のメーメ（お目見得）と3か月間の「見習い」期間がすんで、でっちに採用されると、呼び名が付けられる。（「山本源一」なら、「源吉トン」。）でっちはスンマ（でっち頭）に伴われて、オモヤ

京都市室町・西陣・祇園における言語生活の調査研究（Ⅱ）

（主家）へあいさつに行く。そのときには、次のようなあいさつをするように教えられた。

「何分、ふつつか者でございますけれども、この身オメナゴウ（「お日長う」は「末長く」の意）どうぞ、よろしゅう願います。」

すると、主人は

「ハヨー、店のことを覚えて、やってくれ。」といて受けた。

このように、でっちはスンマから、礼儀作法からことばづかいまで、厳しくしつけられた。

② 西 陣（§83）

昭和初年ごろの西陣では、尋常小学校卒業者が、多くでっちになった。室町商家にみられるような改まったあいさつはみられないが、親が、でっち入りの子どもをつれてきて、次のような簡略なあいさつをした。（以下、主として、上京区中筋通り千本東入ル 山川機業店の例である。）

親—「どうぞ、この子を置いてヤットクレヤス。どうぞ、一人前にしてヤットクレヤス。」

主人—「いちおう、あずかりマヒョ。」

その後、でっち見習い期間として、3か月ほど様子を見てから、でっちに採用される。なお、でっちに採用されたもので、小学校の中退者は、嘉楽小学校の夜間部にはいり、小学6年を卒業した。

〔注2〕 「オシキセ渡し」のあいさつ（§84）

オシキセ（為著せ・仕著せ）は、商家や機屋で奉公人に与える時服^{じふく}のことである。昭和初期ごろには、次のようなしきたりで、オシキセが渡された。

① 室 町（§85）

室町問屋街では、（正月と7月のヤブ入りの前）年2回、オシキセとして、主人からでっちに、次のようなものを渡す習慣であった。（これを「オシキセ渡し」という。）冬のオシキセとして、でっちに渡すものは、木綿のしまの着物と、紺の小倉の角帯とまえだれと小遣20銭ぐらいのお祝儀などであった。室町の山口源かたでは、明治末ごろまでは、オシキセ渡しの日には、旦那と奥さんが座敷の正面に座し、20人ほどの「ウチ別家」が左右に、その中間に番頭以下全員が並ぶ。オシキセを受けたでっちは、次のように、お礼のことばを述べる。

「不調法なわたくしに、結構なオシキセを頂戴いたしまして、誠にありがとうございました。」

② 西 陣（§86）

1月14日の夜と7月14日の夜の年2回、オシキセを渡した。主人は客間において、主人が店の者に、番頭からひとりずつ順番に呼んで渡していった。

主人—「いつもはご苦労サン、これは粗末なもんヤけど……。」

奉公人—「不調法な者に、結構なオシキセを頂きまして、ありがとうございました。」

冬のオシキセとして、でっちは、しまの着物と紺の小倉の角帯に、下着のシャツとパッチ、足袋に下駄まで新調してもらい、ご祝儀として、小遣いの金一封をもらう。この縞の着物は、でっちには木綿である。が、3年すると、絹が少しまじる。数え歳19歳になると、無地の羽織が、数え歳21歳になると、羽二重の紋のついた羽織がつく、着物も絹になる。煙草入れももらった。

〔注3〕 ヤブイリ（藪入り）のあいさつ（§87）

① 室 町（§88）

昭和初年の室町商家では、奉公人は正月の3日と7月の盆にヤブイリ（商家ではヤドイキという）をした。市内のものは、その日のうちに店に帰り、市外の場合は2日ほどひまをもらう。その時、主家の奥さんが気を配って、菓子を持たせる。実家へ帰ったら、両親に次の「ヤブイリのあいさつ」をした。（市内の場合には）

「このたび、ヤブイリのおひまを頂きました。きょうの日の暮れまで、お許しが出来ましたから、よろ

しゅうお願いします。」

このようにあいさつをすることを教えられ、それを実行する。ヤブイリした者は、ナワノレンをおろす（夕方の閉店）までに、帰店しなければならない。家からみやげを持って帰店したとき、次のようなあいさつを主家の奥さんにする。

「どうもありがとうございます。誠に勝手をいたしました。」

こういって、奥へみやげを出す。すると、奥から、

「あんたたちおあがり。」

といわれ、これを店の者は楽しみにして分けて食べた。

② 西 陣 (§ 89)

昭和初年の西陣では、奉公人は、1月15日と7月15日から、それぞれ3日間、オンキセ・小遣い・手みやげをもらってヤブイリした。

奉公人—「これから、ヤブイリにやらさせていただきます。」

奥さん—「ハヨー帰っておいでや。」

実家に帰ると、

奉公人—「ヤブイリで、みっか、お暇をいただいてまいりました。これは、お店からのおみやげです。ヨロシイ、ユータハリました。」

3日間のヤブイリが終わって、主家に帰ってきて、次のあいさつをした。

奉公人—「オーキニ、おそくなりました。ただいま帰りました。これは粗末なものですけど、家からのおみやげです。」

奥さん—「それは、ごていねいサンに、オーキニ。」

〔注4〕 祇園の「えりかえ」のあいさつ (§ 90)

舞子から芸子になることを「えりかえ」（赤いえりを白^{てるかず}いえりにかえる）といつてふれる。男衆が、

「〇〇さん（たとえば「照和さん」）の襟カエデー」という。

それにつづいて本人も、

「どうぞ、オタノ申します。」という。

受ける側は、

「おめでとうサンドス。」といつて受ける。（§ 62-④参照）

〔注5〕 祇園の「自前披露」のあいさつ (§ 96)

自前^{じまえ}になった芸子は、男衆を伴って、ひいきのお茶屋へひろめのあいさつに行く。男衆が、

「こんど、自前にならハリまして。」という。これに続いて、本人も、

「どうぞ、ヨロシユーお願いします。」という。

お茶屋の女主人は、

「おめでとうサンドス。オキバリヤッシャ。」

といつて受ける。

〔注6〕 祇園の「引き祝い」のあいさつ (§ 92)

芸子を引くときには、世話になったところ（お茶屋など）へ、あらかじめ男衆だけで、「引き祝い」のあいさつに行く。

「〇〇サンの引き祝いでス。」

といつて、赤いオコワ（シラメンのときは、永久に引く。）を出す。

受ける側は、

「オメデトーサンドス、オーキニ。」

京都市室町・西陣・祇園における言語生活の調査研究（Ⅱ）

という。その時、祇園の紋章である「つなぎ団子」のオジュー（重箱）を使う。数日後、本人が男衆を伴って正式に、あいさつに行く。男衆が、

「オーキニ　ながながと。」という、先方は、
「こちらこそ。おめでとうさんドス。」

といて受ける。本人は、

「オーキニ　ながながと、お世話になりました。」
とあいさつする。

〔注7〕 事始めのあいさつ（§93）

事始め（12月13日）は、正月の準備をはじめの日で、すすはらいが行なわれる。事始めは現行されている。

① 室　　町（§94）

室町の商家では、12月13日に、別家が主家に3升づきの鏡餅二重ねふたがさを持参して、あいさつに行く。またこの日から年末にかけて、お歳暮オモヤを持参して、

「オシツメマンテ、オコトーサンドス。」
と、一年のあいさつをいう。

② 西　　陣（§95）

西陣では、別家の主人が世話になった主家へ、3升づきの鏡餅一重ねを持って、

「オンツマリマシテ、オコトーサンドス。きょう、すえさせて頂きます。」

と、あいさつする。

この日の夕食には、大根をきざんで浮かした味噌汁オミノオンと塩いわしを食べる習わしがある。なお、12月13日から12月31日まで、会う人ごとに、

「オンツマリマシテ、オコトーサンドス。」

とあいさつをかわす。

③ 祇　　園（§96）

祇園では、舞子・芸子は自分の修めた芸の師匠・姉芸子・見習い茶屋へお鏡をおさめて、

「オメデトーサンドス。どうぞ、あい変わります。」

と、あいさつをする。すると、先方では、

「オメデトーサンドス。オキバリヤッシャ。」

といて受ける。なお、この時に、おかがみを、舞子・芸子は1升（5合の一重ね）、お茶屋はそのオモヤへ3升おさめる。

〔注8〕 大晦日のあいさつ（§97）

昭和初年ごろの習慣を次に示す。

① 室　　町（§98）

室町の商家では、「係り」のものが得意先へおおみそかの回礼に行った。その時、次のようなあいさつをした。

「いよいよおし詰まりまして、本年中ちゆうはいろいろと格別のお引き立てに預りまして、ありがとうございます。どうぞ来年もよろしく。よいお歳をお取りになりますように。」

② 西　　陣（§99）

西陣では、おおみそかの夜の9時ごろ、別家の主人は主家へ1年最後のあいさつに行く。その時、次のようなあいさつをする。

「おしつまりまして、オコトーサンドス。本年はいろいろご厄介になりました。どうぞ、ご機嫌ヨウ、オ祝イヤシテオクレヤス。」

すると、主家の主人は「キゲンヨウ、よい歳を迎えるように。」
といて受ける。そして、小皿につけた煮メと酒1本をつけ、つごもりそばを食べさせて、帰した。

③ 祇園 (§100)

祇園の花街では、舞子や芸子たちは、12月31日の午後8時ごろから、師匠・姉芸子・見習い茶屋・ひいきにしてもらっている茶屋へ、おおみそかのあいさつ回わりをはじめ。その時、次のようなあいさつをする。師匠・姉芸子には、

「オコトーサンドス。ツユとしてはオーキニ。あい変わりませず。」

というと、師匠・姉芸子は、

「オコトーサンドス。こちらこそ、あい変わりませず。」

と、受ける。

また、見習い茶屋やひいきにもらっている茶屋へは、

「おかあさん、オコトーサンドス。あとでどうぞ。」(「知らしトクレヤシヤ」を略)

と、あいさつする。すると、お茶屋の女主人が、

「オコトーサンドス。あとでどうぞ、また、キトクリヤシヤ。」

と受ける。

〔注9〕 新年のあいさつ (§101)

① 室町 (§102)

室町の商家では、別家の主人は揃って正月5日に、主家へ行って、新年のご祝儀を申し入れる。次の口上は、千吉商店の別家の妻と本家の大奥さんのものである。

別家の妻の申し入れ、

「新年はおめでとう存じます。日々はきびしいお寒さでございます。平日は申し訳もございません、ごぶさた申しあげております。みなさま、お揃いあそばしまして、ご機嫌よろしゅうございますか。旧年ちゅうはひとかたならぬお世話になりました、厚くお礼申しあげます。どうぞ、今年もよろしゅうお願い申しあげます。」

本家の大奥さんの受け、

「あけましておめでとう。仰せのとおり、日々はお寒いことです。旧年ちゅうはみなご苦労さんになりました、また今年もよろしゅうお願い申します。ただ今はご一統から、結構なおみあげありがとうございます。」

なお上記の申し入れと受けのことばでは、それぞれ敬語がよく使い分けられている。

② 西陣 (§103)

西陣の機屋では、別家の妻は、1月3日に、主家へ新年のご祝詞を申し入れる。

別家の妻——「おめでとうございます。ふだんはごぶさたがちでございます。まいど、またお世話になります。どうぞ、本年もあい変わりませず。どうぞ、ごひいきにお出入りのできますよう、お願い申しあげます。」

本家の妻——「おめでとうございます。本年も、あい変わりませず、お仕事にはげむよう頼みます。」

③ 祇園 (§104)

㊦ 身内どうし

子方屋では、女主人をはじめ内子の舞子・芸子が、雑煮を祝う前に、次のようにあいさつする。まず、内子の舞子や芸子が、

「おかあさん、オメデトーサンドス。」と、いうと、

女主人が、

「オメデトーサンドス。どうぞゴイットー（ご一統）に。」

と受けて、全員ではがらかに大笑いする習わしである。この笑いは、新年の縁起をかついだ福笑いである。

④ 新年の回礼

舞子・芸子は、師匠・姉芸子・見習茶屋・ひいきのお茶屋へ、新年のあいさつ回わりをして、次のようなあいさつをする。

「オメデトーサンドス。あい変わりませず。」

すると、見習茶屋・ひいきのお茶屋では、

「オメデトーサンドス。あい変わりませず。」

と聞いて、受ける。

〔注10〕 八朔のあいさつ（§105）

① 室 町（§106）

室町の問屋街では、別家の主人は8月1日に、別家の妻は8月7日に八朔のあいさつをする。「八朔の回礼」といって、主家や得意先へあいさつに行く。また店のものどうしても、あいさつを交わした。この習慣は昭和初年ごろには行なわれていた。

㊦ 八朔の回礼

室町問屋街では、八朔の回礼といつて、8月7日に、別家の妻君がオモヤへ八朔のあいさつに行く。サメコモン（鯨小紋）の着尺をきて、羽織は門で脱いで入る。主家の奥さんに、次のあいさつをした。

「当日はおめでとう存じます。平日はごぶさたいたしました。旦那さま、〇〇（奥さんの名）さまには、ご機嫌うるわしゅう、誠におめでとうございます。先日は結構なものをいただきまして、誠にありがとうございます。」

と、主家のごきげんうかがいをし、あわせて八朔の心付けの礼を述べる。すると、主家の主人は、次のように受ける。

「日々たいへんご苦労さんでした。今後とも体を大切にしてください。」

④ 店 内

うちのものどうし（でっち・若い人・番頭など）は、次のあいさつをいかわす。

「今日はお日柄も宜しく、おめでとうございます。不調法なものでございますけれども、今後とも宜しく願ひいたします。」

なお、室町の矢代仁かたでは、得意先への八朔の回礼は、大正7、8年ごろまで行なつた。

② 西 陣（§107）

8月1日に、別家の主人が、緋の黒の紋付の羽織を着て、主家を訪問する。

別家の主人——「キビシイ、お暑うございます。どなたもお変わりございませんか。ふだんは、ごぶさたばかりしておりますが、みなさんは達者でございますか。」

主家の主人——「お暑うございます。あんたも、お元気でけっこうです。」

なお、西陣の八朔のあいさつには、他地域のように、「おめでたい」とは言わない。西陣の小西家『歳中用事』によると、「朔日、八朔とも田実とも申す祝日」ともあり、田実（頼む）の儀式だから、「おめでとう」の意味をもたないと言われている。そして、また「神々様江御酒造御膳備へル」ともある。

③ 祇 園（§108）

祇園の花街では、8月1日に八朔のあいさつ回わりをする。おかあさん（女主人）はうち子をつれて、ひいきすじ（お茶屋）や姉芸子のところへ行って、次のあいさつをする。

おめでとうサンドス。いつもお世話になりまして、いつも〇〇（たとえば「照和」）がお世話にな

りまして。
という。すると、ひいきすじのお茶屋の女主人・姉芸子は、
「おめでとうサンドス。」
といて受ける。
なお、明治時代までは、毎月ついたちに、「ついたちのあいさつ」(§109)が交わされた。次にこれを付記する。

① 室 町 (§110)

室町の矢代仁かたのついたちのあいさつは次のようである。(八朔の回礼に準じる。)

「当日はおめでとう存じます。平素は何かとお世話になりまして、誠にありがとうございます。」

② 西 陣 (§111)

毎月1日は、昼に、家じゅうで、次のようにあいさつする。

主人——「さあ、祝いましょう。」

家族——「お祝ヤス。」

こうして食事がはじまる。明治初年までは、2食であったので、この日には午後4時ごろに、「お節^{せち}」
といて、家じゅう揃って祝った。

なお、小西家の『歳中用事』に、たとえば、3月のところに、「朔日毎月並み通り家内も午後肴と焼物と付て汁御贄付候事」などとなっている。

③ 祇 園 (§112)

祇園の花街では、舞子・芸子は、毎月ついたちに、ひいきすじのお茶屋へあいさつ回わりをする。その時、次のようなあいさつを交わす。舞子・芸子が、

「おめでとうサンドス。またあとで知ラントクレヤッシャ。」

という、お茶屋の女主人は、

「おめでとうサンドス。またあとでキトクリッシャ。」

と受ける。

なお、身うちどうしには、ついたちのあいさつはしない。

む す び (§113)

従来、「京都方言(京ことば)研究」の重要性を力説する人たちはあったが、実際に京ことばを総合的に調査したものはほとんどみられない。われわれは『尼門跡の言語生活の調査研究』(昭和40年8月刊)に引き続いて、室町商家・西陣機屋・祇園花街の三集団の言語生活を調査し、京ことば研究の体系化への基礎資料を整えてきた。今回の言語調査は、職業語・身振り語・命名・あいさつのような範囲に限り、本稿では、主としてその実態の記述を行なったが、その考察や三集団における文字言語生活資料(たとえば室町の「家訓の読み聞かせ」や祇園のしるし書きなど)および「人代名詞や呼称」の問題についての調査結果は次稿に譲った。

また、三集団以外の、たとえば、清水焼職人の言語生活、茶道・華道の家元の言語生活、賀茂の社家ことばなど、伝統的な集団における言語法との関連も未だ探究されていない。さらに、これらの集団を全国の同種職業集団と比較することも必要である。それらをまとめて、われわれは、今後の調査研究によって、京ことばの総合的、体系的研究を進める方針である。

Linguistic Researches of Kyoto Muromati, Nisizin, Gion Quarters.

Yūiti Inokuti

As Kyoto was the capital of Japan, Kyoto city dialect is recognized as one of the most important dialect of the Japanese language. In this paper, the author researches the language life of Kyoto Muromati and Nisizin quarters merchants, and Gion Geisya Girls speech.

The author intends to describe the slangs, the models of denomination, and the greetings in this three quarters, and the gesture language of Gion geisya girls.